

# 竹の木戸

国木田独歩

青空文庫



## 上

大庭真蔵おおばという会社員は東京郊外に住んで京橋区辺の事務所に通っていたが、電車の停留所まで半里はんみち以上もあるのを、毎朝欠かさずテクテク歩いて運動にはちようど可いと言っていた。温厚おしなしい性質だから会社でも受が可よかった。

家族は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる細君、細君の妹のお清きよ、七歳ななつになる娘の礼ちゃんこれに五六年前から居るお徳という女中、以上五人に主人あるじの真蔵を加えて都合六人であつた。

細君は病身であるから余り家事に関係しない。台所元の事は重おもにお清とお徳が行やつて、それを小まめな老母が手伝っていたのである。別わけても女中のお徳は年こそ未まだ二十三であるが私はお宅うちに一生奉公をしますという意気込で権力が仲々強い、老母すら時々この女中の言うことを聞かなければならぬ事もあつた。我わが儘まま過るとお清から苦情の出る場合もあつたが、何しろお徳はお家大事と一生懸命なのだから結極つまりはお徳の勝利かちに帰するのであつた。

生垣いけがき一つ隔てて物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮している。亭主が二七八で、女房はお徳と同年輩位、そしてこの隣交際となりつきあいの女性によしよ二人は互に負けず劣らず喋舌しゃべり合つていた。

初め植木屋夫婦が引越して来た時、井戸がないので何卒どうか水を汲ましてくれと大庭家に依頼たのみに来た。大庭の家ではそれは道理もつともなことだと承諾ゆるしてやった。それからかれこれ二月ばかり経たつと、今度は生垣いけがきを三尺ばかり開放あけさしてくれろ、そうすれば一々御門まわへ迂廻まわらんでも済むからと頼みに来た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊ことにお徳は盗棒どろぼうの入口こしらを造えるようなものだと言張あした。が、しかし主人あるじ真蔵まねての平常かねての優しい心から遂ついににこれを許すことになつた。其方そちらで木戸を丈夫あけたてに造り、開閉あけたてを嚴重あにするという条件ぶざいであつたが、植木屋は其処そこらの藪やぶから青竹を切つて来て、これに杉の葉など交ぜ加えて無細工ぶざいの木戸を造くつて了つた。出来上つたのを見てお徳は「これが木戸だろうか、掛金かけがねは何処どこに在あるの。こんな木戸なんか有るも無いも同じことだ」と大声で言つた。植木屋の女房のお源は、これを聞きつけ「それで沢山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るような立派な木戸が出来るものか」と井戸いどばた辺かまで釜かまの底を洗いながら言つた。

「それじゃア大工さんを頼めば可い」とお徳はお源の言葉が癩しやくに触さわり、植木屋の貧乏なことを知りながら言った。

「頼まれる位なら頼むサ」とお源は軽く言った。

「頼むと来るよ」とお徳は猶もひと一つ皮肉を言った。

お源は負けぬ気性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於おけるお徳の勢力を知っているから、逆さからつては損と虫を圧おさえて

「まアそれで勘弁しておくれよ。出入ではいりするものは重あたいに私ばかりだから私さえ開閉あけたてに気を附けりやア大丈夫だよ。どうせ本式の盜棒なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやア仕ないからね」

と半分折れて出たのでお徳

「そう言えばそうさ。だからお前さんさえ開閉あけたてを嚴重に仕ておくれなら先まア安心だが、お前さんも知つてるだろう此里ここはコソコソ泥棒や屑屋くずやの悪い奴やつが漂行うろつろするから油断も間す際きもなりや仕ない。そら近頃このころ出来たパン屋の隣に河井様さんて軍人さんがあるだろう。彼家あそこじゃア二三日前に買立の銅あかの大きな金かな盥だらをちよろりと盜やられたそうだからねえ」

「まアどうして」とお源は水を汲む手を一寸ちよつと休めて振り向いた。

「井戸辺に出ていたのを、女中が屋後に干物に往ったぼつちりの間に盗られたのだとサ。矢張木戸が少しばかり開いていたのだとサ」

「まア、真実に油断がならないね。大丈夫私は気を付けるが、お徳さんも盗られそうなのは少時でも戸外に放棄つて置かんようになさいよ」

「私はまアそんなことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れることが有るからね、お前さんも屑屋なんかを付けておくれよ。木戸から入るにや是非お前さん宅の前を通るのだからね」

「ええ気を付けてともね。盗られる日にや薪一本だつて炭一片だつて馬鹿々々しいからね」

「そうだとも。炭一片とお言いだけでも、どうだろうこの頃の炭の高値いことは。一俵八十五銭の佐倉があれだよ」とお徳は井戸から台所口へ続く軒下に並べてある炭俵の一指して、「幾千入てるものかね。ほんとに一片何銭に当くだろう。まるでお金を涼炉で燃しているようなものサ。土竈だつて堅炭だつて悉な去年の倍と言つても可い位だからね」とお徳は嘆息まじりに「真実にやりきれや仕ない」

「それに御宅は御人数も多いんだから入用ことも入用サね。私のとこなんか二人きりだか

ら幾干も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計量炭を毎日のように買うんだからね、全くやりきれや仕ない」

「全く骨だね」とお徳は優しく言った。

以上炭の噂まで来ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さないうで何時しか元のお徳お源に立還りぺちやくちやと仲善く喋舌り合っていたところは埒も無い。

十一月の末だから日は短い盛で、主人真蔵が会社から帰ったのは最早暮れがかりであった。木戸が出来たと聞いて洋服のまま下駄を突掛け勝手元の庭へ廻わり、暫時は木戸を見てただ微笑していたが、お徳が傍から

「旦那様 大変な木戸で、御座いますしよ」と言ったので

「これは植木屋さんが作らえたのか」

「そうで御座います」

「随分妙な木戸だが、しかし植木屋さんにしちやア良く出来てる」と手を掛けて揺振つてみて

「案外丈夫そうだ。まアこれでも可い、無いよりか増だろう。その内大工を頼んで本当に作らすことに仕よう」と言つて「竹で作えても木戸は木戸だ、ハ、ハハハ」と笑いなが

ら屋内へ入った。

お源はこれを自分の宅で聞いていて、くすくすと独で笑いながら、「眞実に能く物の解る旦那だよ。第一あんな心持の優しい人つたらめつたに有りや仕ない。彼家じや奥様も好い方だし御隠居様も小まめにちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お清様は出戻りだけに何処か執拗れるが、然し氣質は優しい方だし」と思いつづけて来てハタとお徳の今日昼間の皮肉を回想して「水の世話にさえならなきや如彼奴に口なんか利かしや仕ないんだけど、房州の田舎者奴が、可愛がつて頂だきや可い気になりやアがつてどうだろうあの図々しい案梅は」とお徳の先刻の言葉を思い出し、「大変な木戸でしようだつて、あれで難癖を附ける積りが合憎と旦那がお取上に相成らんから可い気味だ。愚態ア見やアがれだ」と又つと気を変えて「だけど感心と言えば感心だよ。容色も悪くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつて嫁にいかれるのに、ああやつて一生懸命に奉公しているんだからね。全く普通の女にや真似が出来ないよ。それに恐しい正直者だから大庭様でも彼女に任かして置きや間違はないサ……」

こんな事を思いながらお源は洋燈を点火て、火鉢に炭を注ごうとして炭が一片もないのに気が着き、舌鼓をして古ぼけた薬罐に手を触つてみたが湯は冷めていないので安心

して「お湯の熱い中うちに早く帰って来れば可い。然し今日もしか前借して来てくれないと今夜も明日も火なした。火ぐらい木葉こっぱを拾つて来ても間に合うが、明日食うお米が有りや仕ない」と今度は舌鼓かわりの代に力のない嘆息ためいきを洩もらした。頭髮かみを乱して、血ちの色けのない顔をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり坐っているこの時のお源の姿は随分憐あわれな様であつた。

其所そこへのつそり帰つて来たのが亭主の磯吉である。お源は単いきなり直前借の金のことを訊きいた。磯は黙つて腹掛から財布を出してお源に渡した。お源は中あたらを査めめて

「たつた二円」

「ああ」

「二円ばかり仕方が無いじゃアないか。どうせ前借するんだもの五円も借りて来れば可いのに」

「だつて貸さなきや仕方がない」

「それやそうだけでも能く頼めば親方だつて五円位貸してくれそんなものだ。これを御覽」  
とお源は空から虚つぼの炭籠すみとりを見せて「炭だつてこれだろう。今夜お米を買つたら幾いく干くらも残りや仕ない。……」

磯は黙つて煙草をふかしていたが、煙管きせるをポンと強く打たたいて、膳ぜんを引寄せ手盛てもりで飯を食

い初めた。ただ白湯を打かけてザクザク流し込むのだが、それが如何にも美味そうであった。

お源は亭主のこの所為に気を吞れて黙って見ていたが山盛五六杯食って、未だ止めそうもないので呆れもし、可笑くもなり

「お前さんそんなにお腹が空いたの」

磯は更に「碗盛けながら「俺は今日半食を食わないのだ」

「どうして」

「今日彼時から往つたら親方が厭な顔をしてこの多忙しい中を何で遅く来ると小言を言つたから、実はこれこれだつて木戸の一件を話すと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、糞忌々しいからそれからグングン仕事に掛つて二時過ぎになるとお茶飯が出たが、俺は見向も仕ないんだ。お女中が来て今日はお美味い海苔巻だから早やく来て食べろと言つたが当頭俺は往かないで仕事を仕掛けてやつたのだ。そんなこんなで前借のこと親方に言い出すのは全く厭だつたけど、言わないじやおられんから帰りがけに五円貸してくれろと言うと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手前の凶々しいのには敵わんよ、そらこれで可かろうつて二円出して与こしたのだ。仕方が無いじやアないか」と磯は腹の空いた訳と

二円外前借が出来なかつた理由を一遍に話して了つた。そして話し了つたころ漸と箸を置いた。

全体磯吉は無口の男で又た口の利きようも下手だがどうかすると啖火交りで今のよう  
に威勢の可い物の言い振をすることもある、お源にはこれが頗る嬉しかつたのである。然  
しお源には連添つれそつてから足掛三年にもなるが未だ磯吉は怠惰者なまけものだか働人はたらきにんだか判断が  
着かのである。東京女の気まぐれ者にはそれで済すんんでゆくので、三日も四日も仕事を休む、  
どうかすると十日も休む、けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅の磯様いそさんだと心得ている、  
だからサアとなれば困りや仕ないと信じている。然し何処どこまで行つたらその「サア」だか  
そんなことはお源も考えたことはない。又たお源は磯さんはイザとなれば随分人の出来な  
い思きつた大胆なことをする男だと頼たのもしがっている。けれどそうばかり思えんこともあ  
る。その実案外いくじ久地くじのない男かしらと思う場合もあるが、それは一文なしになつて困り  
抜ぬいいた時などで、そう思うと情なさけなくなるからなるべくそれは自分で打消していたのである。  
実際磯吉は所謂「解らん男」で、大庭の女連おんなれんは何となく薄気味うすきび悪く思つていた。  
だからお徳までが磯には憚はばかる風がある。これがお源には言うに言われない得意なので、お  
徳がこの風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使った時など嬉うれしさが込上げて来るのであ

つた。

それで結極のべつ貧乏の仕飽しあきをして、働き盛りでありながら世帯らしい世帯も持たず、何時いつも物置か古倉すみこの隅すみのような所ばかりに住んでいる、従ってお源も何時しか植木屋かの女か房連かあれんから解らん女だ、つまり馬鹿だとせられていたのだ。

磯吉めしの食事が済むとお源は筈ざるを持って駈出かけだして出たが、やがて量はかりずみ炭すみを買て来て、火を起しながら今日お徳と木戸のことで言いあつたこと、旦那が木戸を見て言つた言葉などをべらべら喋舌しゃべつて聞かしたが、磯は「そうか」とも言わなかつた。

そのうち磯が眠そうに大欠伸おおあくびをしたので、お源は垢染あかじみた煎餅布団せんべいぶとんを一枚敷いて一枚被かけて二人一緒に一個身体ひとつからだのようになつて首を縮めて寝て了つた。壁の隙間すきまや床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足も縮められるだけ縮めているが、それでも磯の背部せなかは半分外はみだしに露はみだし出ていた。

中

十二月に入ると急に寒気が増して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突だ然しに冬の特

色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初て郊外に住んだ連中を喫驚させた。然し大庭真蔵は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平気で通勤していたが、最初の日曜日は空青々と晴れ、日が煌々と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日和が又立返ったようなので、真蔵とお清は留守居番、老母と細君は礼ちゃんとお徳を連て下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと称して出慣れぬ女連は外出の仕度に一騒するのである。それで老母を初め細君娘、お徳までの着変やら何かに一しきり騒しかったのが、出て去った後は一時に森となつて家内は人氣が絶たようになった。

真蔵は銘仙の襦袍の上へ兵古帯を巻きつけたまま日射の可い自分の書齋に寝転んで新聞を読んでいたがお午時前になると退屈になり、書齋を出て縁辺をぶらぶら歩いていると

「兄様」と障子越しにお清が声をかけた。

「何です」

「おホホホ『何です』だって。お午食は何にも有りませんよ」

「かしこ参りました」

「おホホホホ『かしこ参りました』だって真実ほんとに何にもないんですよ」

其処そこで真蔵はお清の居る部屋へやの障子を開けると、内なかではお清がせつせと針仕事をしてい  
る。

「大變勉強だね」

「礼ちゃんの被布ひふですよ、良い柄でしょう」

真蔵はそれには応こたえず、其処そこ辺を見廻わしていたが、

「もう少し日射ひあたりの好い部屋で縫やつたら可よきそうなものだな。そして火鉢ひばちもないじやないか」

「未だ手が凍結かじけるほどでもありませんよ。それにこの節は御儉約きめということに決定きめしたので  
すから」

「何の御儉約だろう」

「炭です」

「炭はなるほど高価たかくなつたに違ちがいが宅うちで急にそれを節約するほどのことはなからう」

真蔵は衣食台所元のことなど一切いっせつ関係かんけいしないから何も知らないのである。

「どうして兄様にいさん、十一月でさえ一月の炭の代がお米の代よりか余程よつほど上うなんですもの。こ  
れから十二、一、二と先まず三月が炭の要いる盛さかりですから儉約出来るだけ仕ないと大變ですよ。

お徳が朝から晩まで炭が要る炭が高価たかいて泣言なばかり言うのも無理はありませんわ」

「だって炭を儉約かぜして風邪かぜでも引ちや何もなりや仕ない」

「まさかそんなことは有りませんわ」

「しかし今日は好い案排あんばいに暖かいね。母上おつかさんでも今日は大丈夫だろう」と両手を伸し

て大欠伸おおあくびをして

「何時なんじかしらん」

「最早もとう直ぐ十二時でしょうよ。お午食ひるにしましょうか」

「イヤ未だ腹が一向空すかん。会社だと午食ひるの弁当が待遠いようだけどなア」と言いながら

其処このを出て勝手の座敷から女中部屋まで覗のぞきこんだ。女中部屋など従これまで来入ったことも無

かつたのであるが、見ると高窓が二尺ばかり開け放しになつてるので、何心なく其処から

首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源が我知らず見上た顔とびたり出会

つた。お源はサと顔を真赤にして狼狽うろたえきつた声を漸やっと出して

「お宅ではこういう上等の炭をお使いなさるんですもの、堪たまりませんわね」と佐倉の切炭

を手に持っていたが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまま並べてある

場処で、お源が木戸から井戸辺いどばたにゆくには是非この傍そばを通るのである。

真蔵も一寸狼狽ちよつとまじいて答に窮きつしたが

「炭のことは私共に解らんで……」と莞爾にっこり微笑わらつてそのまま首を引込めて了つた。

真蔵は直ぐ書齋に返つてお源の所為しよせに就て考がえたが判断が容易つつかに着ない。お源は炭を盗んでいるところであつたとは先ず最初に来る判断だけけれど、真蔵はそれをそのまま確信することが出来ないのである。實際ただ炭を見ていたのかも知れない、通りがかりだからツイ手に取つて見ているところを不意に他人ひとから瞰下みおろされて理由わけもなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽うろたえたのかも知れない。と考えれば考えられんこともないのである。真蔵はなるべく後の方のちに判断したいので、遂にそう心で決定きめしてもかく何人だれにもこの事は言わんことにした。

しかし万ひよつと一もし盗んでいたとすると故下うつつちやつて置いては後あとが悪かろうとも思つたが、一度見られたら、とても悪事を続行つづけることは得為えすすまいと考えたから尚なお更らこの事は口外しない方が本當だと信じた。

どちらにしてもお徳が言つた通り、彼処あそこへ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はそろそろ帰宅かえつて来た。一同が茶の間に集まつてがやが

やと今日の見聞を今一度繰返して話合うのであった。お清は勿論、真蔵も引出されて相槌を打って聞かなければならない。礼ちやんが新橋の勸工場で大きな人形を強請つて困らしたの、電車の中に泥酔者が居て衆人を苦しめたの、真蔵に向て細君が、所天は寒むがり坊だから大徳で上等飛切の舶来のシャツを買つて来たの、下町へ出るとどうしても思つたよりか余計にお金を使うだの、それからそれと留度がない。そして聞く者よりか喋舌ている連中の方が余程面白そうであつた。

先ずこのがやがやが一頻止むとお徳は急に何か思い出したように起て勝手口を出たが暫時して返つて来て、妙に真面目な顔をして眼を円くして、

「まあ驚いた！」と低い声で言つて、人々の顔をきよるきよる見廻わした。人々も何事が起つたかとお徳の顔を見る。

「まあ驚いた！」と今一度言つて、「お清様は今日屋外の炭をお出しになりやしませんね？」と訊いた。

「否、私は炭籠の炭ほか使わないよ」

「そうら解つた、私は去日からどうも炭の無くなりかたが変だ、如何炭屋が巧計をして底ばかり厚くするからつてこうも急に無くなる筈がないと思つていたので御座いますよ。

それで私は 想 当 てる事があるから昨日お源さんの留守に障子の破 目から内をちよ  
いと覗いて見たので御座いますよ。そうするとどうでしょう」と、一段声を低めて「あの  
破火鉢に佐倉が二片ちやんと埋って灰が被けて有るじやア御座いせんか。それを見て  
私は最早必定そうだと決定して御隠居様に先ず申上げてみようかと思いましたが、一つ係蹄  
をかけて此方で験めた上と考がえましたから今日行つて試たので御座いますよ」とお徳  
はにやり笑つた。

「どんな係蹄をかけたの？」とお清が心配そうに訊いた。

「今日出る前に上に並んだ炭に一々符号を付けて置いたので御座います。それがどうでし  
よう、今見ると符号を附けた佐倉が四個そっくり無くなつていたので御座います。そして  
土竈は大きなのを二個上に出して符号を付けて置いたらそれも無いのです」

「まあどうしたと云うのだろう」お清は呆れて了つた。老母と細君は顔見合して黙つてい  
る。真蔵は偕は愈々と思つたが今日見た事を打明けるだけは矢張り見合した。つまり真  
蔵にはそうまでするに忍びなかつたのである。

「で御座いますから炭泥棒は何人だか最早解つてます。どう致しましょう」とお徳は人々  
がこの大事件を喫驚してごうごうと論評を初めてくれるだろうと予期していたのが、お

清が声を出してくれた外、旦那を初め後の人は黙っているので少し張合が抜けた調子でこ  
う問うた。暫時しばらく誰も黙っていたが

「どうするツて、どうするの？」とお清が問い返した、お徳は少々焦急じれつたくなり、

「炭をですよ。炭をあのままにして置けばこれから幾干いくらでも取られます」

「台所の縁の下はどうだ」と真蔵は放擲うっちゃつて置いてもお源が今後容易に盗み得ぬことを  
知っているけれど、その理由わけを打明けないと決心きめてるから、仕様事なしにこう言った。

「充満いっまんで御座います」とお徳は一言で拒絶した。

「そうか」真蔵は黙つて了う。

「それじゃこうしたらどうだろう。お徳の部屋の戸棚とだなの下を明けて当分ともかく彼処あそこへ炭  
を入れることにしたら。そしてお徳の所有品もは中の部屋の戸棚とだなを整理かたづけて入れたら」と細  
君が一案を出した。

「それじゃアそう致しましょう」とお徳は直ぐ賛成した。

「お徳には少し気の毒だけれど」と細君は附加つけたした。

「否いいえ、私は『中の部屋』のお戸棚とだなへ衣類きものを入れさして頂ければ尚なお結構で御座ごさいます」

「それじゃ先まあそう決定きめるとして、全体物置を早く作れというのに真蔵がぐずぐずしてい

るからこういうことになるのです。物置さえあれば何のこともないのに」と老母が漸と口を利たと思つたら物置の愚痴。真蔵は頭を搔いて笑つた。

「否、こういうことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座いますよ、ですから私は彼処を開けさすのは泥棒の入口を作えるようなものだど申したので御座います。今となれや泥棒が泥棒の出入口を作えたようなものだ」とお徳が思わず地声の高い調子で言つたので老母は急に

「静に、静に、そんな大きな声をして聴いたらどうします。私も彼処を開けさすのは厭いやツたが開けて了つた今急にどうもならん。今急に彼処を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時まであんな物置小屋みたような所にも居られんで移転なりどうなりするだろう。そしたら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも言わんで知らん顔を仕てる、お徳も決してお源さんに炭の話など仕ちやなりませんぞ。現に盗んだところを見たのではなし又高が少しばかりの炭を盗られたからつてそれを荒立てて彼人者だちに怨恨れたら猶お損になりますぞ。真実に」と老母は老母だけの心配を諄々と説いた。

「真実にそうよ。お徳はどうかすると譏諷を言い兼ないがお源さんにそんなことでもすると大変よ、反対に物言を附けられてどんな目に遇うかも知れんよ、私はあの亭主

の磯が気味が悪くつて成らんのよ。変妙来な男ねえ。あんな奴に限つて向う不見に人に喰つてかかるよ」とお清も老母と同じ心配。老母も磯吉のことは口には出さなかつたが心には無論それが有たのである。

「何にあの男だつて唯の男サ」と真蔵は起上がりながら「然ども先ア関係わんが可い」真蔵は自分の書齋に引込み、炭問題も一段落着いたので、お徳とお清は大急で夕御飯の仕度に取り掛つた。

お徳はお源がどんな顔をして現われるかと内々待っていたが、平常も夕方には必然水を汲みに来るのが姿も見せないので不思議に思つていた。

日が暮て一時間も経てから磯吉が水を汲みに来た。

下

お源は真蔵に見られても巧く誤魔化し得たと思つた。ちようど真蔵が窓から見下した時は土竈炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手で圧え、更に一個取ろうとするところであつたが、元来性質の良い邪推などの無い旦那だから多分気が附かなかつただらうと信

じた。けれど夕方になつてどうしても水を汲みにゆく気になれない。

そこで磯吉が仕事から帰る前に布団を被つて寝て了つた。寝たつて眠むられは仕ない。

垢染た煎餅布団でも夜は磯吉と二人で寝るから互の体温で寒気も凌げるが一人では板のようにしやちつ張つて身に着かないで起きているよりも一倍寒く感ずる。ぶるぶる慄え

そうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつたところを見ると人が寝てるとは承知ん位だ。

色々考えると厭悪な心地がして来た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。

先達からちよくちよく盗んだ炭の高こそ多くないが確的に人目を忍んで他の物を取

つたのは今度が最初であるから一念其処へゆくと今までにない不安を覚えて来る。この

不安の内には恐怖も羞恥も籠つていた。

眼前にまざまざと今日の事が浮んで来る、見下した旦那の顔が判然出て来る、そして

てテレ隠しに炭を手玉に取つた時のことを思うと顔から火が出るように感じた。

「真実にどうしたんだろう」とお源は思わず叫んだ。そして徐々逆上気味になつて来た。

「もしか知れたらどうする」。 「知れるものかあの旦那は性質が良いもの」。 「性質の良

いは当にならない」。 「性質の善良のは魯鈍だ」。 と促急込んで独問答をしていたが

「魯鈍だ、魯鈍だ、大魯鈍だ」と思わず又叫んで「フン何が知れるもんか」と添足した。そして布団から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戸に月が射している。けれども起きて洋燈を点けようとも仕ないで、直ぐ首を引込て又た丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて来た。

頭が割れるように痛むので寝たのだと聞いて磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈を点け、葉罐が微温湯だから火鉢に炭を足し、水も汲みに行つた。湯の沸騰るを待つ間は煙草をパクパク吹していたが

「どう痛むんだ」

返事がないので、磯は丸く凸起つた布団を少時く熟と視ていたが

「オイどう痛むんだイ」

相変らず返事がないので磯は黙つて了つた。その中湯が沸騰て来たから例の通り氷のように冷た飯へ白湯を注いで沢庵をバリバリ、待ち兼た風に食い初めた。

布団の中でお源が啜泣する声が聞えたが磯には香物を嘔む音と飯を流し込む音と、美味しいので夢中になつていて聞えなかつた、そして飯を食い終つたころには啜泣の声も止んだのである。

磯が火鉢の縁を忽々叩き初めるや布団がむくむく動いていたが、やがてお源が半分布団に巻纏つて其処へ坐つた。前が開て膝頭が少し出ていても合そうとも仕ない、見ると逆上せて顔を赤くして眼は涙に潤み、頻りに啜泣を為ている。

「どうしたと云うのだ、え？」と磯は問うたが、この男の持前として驚いて狼狽えた様子は少しも見えない。

「磯さん私は最早つくづく厭になつた」と言い出してお源は涙声になり

「お前さんと同棲になつてから三年になるが、その間眞実に食うや食わずで今日と思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も楽を仕様とは思わんけれど、これじゃ余りだと思ふわ。お前さんこれじゃ乞食も同然じゃ無いか。お前さんそうは思わないの？」

磯は黙つている。

「これじゃ唯だ食つて生きてるだけじゃないか。餓死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それじゃ余り情ないと私は思うわ」涙を袖で拭いて「お前さんだつて立派な職人じゃないか、それに唯た二人きりの生活だよ。それがどうだろう、のべつ貧乏の仕通しでその貧乏も唯の貧乏じゃ無いよ。満足な家には一度だつて住まないで何時でもこんな物置か——」

「何を何時までべらべら喋舌てるんだい」と磯は矢張お源の方は向ないで、手荒く煙管を撃いて言った。

「お前さん怒るなら何程でもお怒り。今夜という今夜は私はどうあつても言うだけ言うよ」とお源は急促込んで言った。

「貧乏が好きな者はないよ」

「そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むの？ お前さんはお酒は呑ないし外に道楽はなし満足に仕事に出てさえおくれなら如斯貧乏は仕ないんだよ。——」

磯は火鉢の灰を見つめて黙っている。

「だからお前さんがも少し精出しておくれならこの節のように計量炭もろくに買ないよ  
うな情ない……」

お源は布団へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に下りて麻裏を突掛けるや戸外へ飛び出した。戸外は月冴えて風はないが、骨身に徹える寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七八丁もゆくと金次という仲間が居る、其家を訪ねて、十時過まで金次と将棋を指して遊んだが帰掛に一寸一円貸せと頼んだ。明日なら出来るが今夜は一文もないと謝絶られた。

帰路かえりみちに炭屋がある。この店は酒も薪まきも量はかりずみ炭も売り、大庭もこの店から炭薪を取り、お源も此店ここへ炭を買いに来るのである。新開地は店を早く終しまうのでこの店も最早閉もっていた。磯は少時しばらく此店ここの前を迂路うろ々々していたが急に店の軒下ひとつに積である炭俵の一個をひよいと肩に乗って直ぐ横の田甫道たんぼみちに外それて了った。

大急で帰宅かえって土間にどしりと俵を下した音に、泣き寝入ねいりに寝入っていたお源は眼を覺したが声こゑを出ださなかつた。そして今のは何の響とも氣に留めなかつた。磯もそのままお源の後から布団ふだんの中に潜もぐり込んだ。

翌朝あしたになってお源は炭俵に氣が着き、喫驚びつくりして

「磯さんこれはどうしたの、この炭俵は？」

「買かって来たのサ」と磯は布団ふだんを被かぶつてるまま答えた。朝飯めしが出来るまでは磯は床を出ないのである。

「何店どこで買ったの？」

「何処どこだつて可いじやないか」

「聞いたつて可いじやないか」

「初公はつこうの近所の店だよ」

「まあどうしてそんな遠くで買ったの。……オヤお前さん今日お米をかうお錢を費つて了やアしまいね」

磯は起上つて「お前がやれ量炭も買えんだのツて八か間しく言うから昨夜金公の家へ往つて借りようとして無つてやがる。それから直ぐ初公の家へ往つたのだ。炭をかうから少ばかり貸せといたら一俵位なら俺家の酒屋で取つて往くと大なこと言うから直ぐ家で初公の名前で持て来たのだ。それだけあれば四五日は保るだろう」

「まあそう」と言つてお源はよろこんだ。直ぐ口を明けて見たかつたけれど、先ア後の事と、せつせと朝飯の仕度をしながら「え、四五日どころか自宅なら十日もあるよ」

昨夜磯吉が飛出した後でお源は色々に思い難んだ末が、亭主に精出せと勧める以上、自分も氣を腐らして寝ていちや何もならない、又たお隣へも顔を出さんと却て疑がわれるとこう考えたのである。

其処で平常の通り弁当持たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一通片附たところバケツを持つて木戸を開けた。

お清とお徳が外に出ていた。お清はお源を見て

「お源さん大變顔色が悪いね、どうか仕たの」

「昨日きのうから少し風邪かぜを引たもんですから……」

「用心いけななさいよ、それは不可いけない」

お徳は「お早あいさつう」と口早あいさつに挨拶あいさつしたきり何も言わない、そしてお源が炭俵ちりょうの並べてないのに気が着き顔色を変えて眼をぎよるぎよるさしているのを見て、にやり笑った。お源は又た早くもこれを看取りみてとお徳の顔を睨にらみつけた。お徳はこう睨にらみつけられたとなると最も早喧嘩うけんかだ、何か甚ひどい皮肉を言いたいがお清が傍そばに居るので辛棒しんぼうしていると十八九になる増屋の御用聞が木戸の方から入て来た。増屋とは昨夜磯吉が炭を盗んだ店である。

「皆みなさん様お早あさう御座ご座います」と挨拶するや、昨日きのうまで戸外そとに並べてあつた炭俵が一個見えないので「オヤ炭は何処どこかへ片附けたのですか」

お徳は待つてたという調子で

「あア悉みんな皆内へ入いれちやつたよ。外へ置くとどうも物騒だからね。今の高価たかい炭を一片ひときれだつて盗られちや馬鹿々々しいやね」とお源を見る、お清はお徳を睨にらむ、お源は水を汲んでふたあしふたあしみあしみあし。二歩三歩歩るき出したところであつた。

「全く物騒ですよ、私の店では昨夜当ゆうべ到一俵盗とうとうすまれました」

「どうして」とお清が問うた。

「戸外に積んだまま、平時放下つて置くからです」

「何炭を盗られたの」とお徳は執着くお源を見ながら聞いた。

「上等の佐倉炭です」

お源はこれ等の問答を聞きながら、齒を喰いしばって、踉蹌いて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投るように置いて大急ぎで炭俵の口を開けて見た。

「まあ佐倉炭だよ！」と思わず叫んだ。

お徳は老母からも細君からも、みつしり叱られた。お清は日の暮になってもお源の姿が見えないので心配して御氣懽取りと風邪見舞とを兼ねてお源を訪ねた。内が余り寂然しておるので「お源さん、お源さん」と呼んでみた。返事がないので可恐々ながら障子戸を開けるとお源は炭俵を脚繼にしたらしく土間の真中の梁へ細帯をかけて死でいた。二日経つて竹の木戸が破壊された。そして生垣が以前の様に復帰した。

それから二月経過と磯吉はお源と同年輩の女を女房に持って、渋谷村に住んでいたが、矢張豚小屋同然の住宅であった。



## 青空文庫情報

底本：「牛肉と馬鈴薯・酒中日記」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45）年5月30日初版発行

1983（昭和58）年7月30日22刷

※「促急込《せきこ》んで」と「急促込《せきこ》んで」の混在は底本通りにしました。

入力：Nana Ohbe

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年6月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 竹の木戸

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>